

創立二十五周年記念号に寄せて

学長 大澤 一雄

本年、横浜商科大学創立二十五周年を迎えるにあたり、『紀要』第七号を記念号として刊行する運びとなった。

顧みると五年前、『横浜商科大学二十年史稿』に刊行の辞を寄せて、私は「重要なのはこの二十年という時間の長短にあるのではなく、この二十年間の歩みが本学においてもっている意味である。——中略——この時間はただ過ぎ去ってしまった時間の集積としてでなく、我々が存在する現在および、現在の延長線上に位置づけられる未来、をも規定する歴史的時間として意味を持つてくるのではなからうか」と書いた。

この感じ方は二十五周年を迎えた現在でも変りはないが、問題は二十周年からさらに五年

を経過した現在、その歳月に相応しい教育・研究面での実績を挙げえたか否か、という点であろう。もちろん、この点に関する評価は人により様々であろうと思われるが、大多数の本学関係者は、程度の差こそあれ五年前に比して教育・研究の面のみならず、研究条件や施設の面において本学が充実の方向に向いつつあることは認められるのではないだろうか。

本学では、開学時、十周年、二十周年を夫々記念して論文集を刊行してきたが、それらの目次を一覧してみても、号を重ねるに従って執筆者の数も増加し、その研究分野も拡大し、専門とするテーマも多岐にわたってきていることを読みとることができる。このことは本学の研究面における充実を示す一証左といえよう。

しかし同時に、物故された方、定年で退職された方、他大学に移られた方など、僅か二十五年の歴史とはいえ、一時期そこに全精力を注入され、現在は本学を去られた方々の数も決して少なくないことにも気付く。

『横浜商大論集』第一号の開学記念号の執筆者十二名中、現在在籍している者は二名にすぎず、最も新しい二十周年記念号でも執筆者十三名中、現在籍者は八名である。

このように見ていくと、五年、十年間隔で慣習的に刊行されている記念論文集が、学術的

刊行物としての性格のほかに、大袈裟な表現かも知れないが、それなりに本学の歴史の歩みを刻するモニュメントとしての役割を担っていることも無視できないように思われる。

私たちは二十一世紀に向けて教育・研究面においてこのモニュメントを絶やすことなく継承し、発展させる努力を惜んではならないと思う。

平成三年十月